

39番目の訪問者

ルフ

1

今夜、毎週火曜9時半にやるサスペンスドラマ『39番目の訪問者』は今期最大の楽しみだ。

同僚はスポーツ観戦が趣味のものばかりで、ドラマなんて女が見る物だ、などと言うことを抜かしていたが、私には関係ない事だった。

30過ぎの男だって楽しみなものなものは楽しみなのだ。

放送日である火曜は残業しても程々にし、余裕を持って帰ることにしている。

始まるまでに食事の支度をして、ご飯を食べながら見る。

これ以上に生きてることを実感できる瞬間があるだろうか。

そんなわけで逸る気持ちを押えて家に帰る途中——突然目の前の風景が歪んだかと思えば、その一瞬後には見知らぬ景色が広がっていた。

住宅街を歩いていたはずが、周りに家一軒見当たらない。

夜道で街灯もなく良く見えはしないが、目の届く距離に人家の灯りもないように思える。

ただただ平原のような風景と、そして粗いながらも人道が見えた。

草木も普通に生えているのだが、どうしてだろう。何か違和感を感じる。

何はともあれ早く家に帰らねば。

そう思っていると、近くに悲鳴が聴こえた。

「くっ……まさかこんな人道の近くまで来てるなんて……」

そこにいたのはやや高そうな服を着た女の子と、それを囲む3匹の黒い犬だった。

近くには倒された馬車と血を流し倒れる従者らしき者もいた。

ただの犬なら馬車で振り切れるだろうが、そいつらは1匹だけでも女の子と同じかそれ以上のサイズで、その獰猛な気配は明らかに見知ったそれとは違っている。

何にせよ犬と人間で道を訊くならば、やはり人間を助けるべきだろう。私はすぐにその場所へと駆け付けた。

「……………っ！」

女の子が私に気付き、驚きの表情を浮かべているが気にしている暇はない。

私は黒い犬のうち2匹をそれぞれ両手で掴み地面へと叩きつける。

ぎゃうんと可愛くもない声をあげるが、手加減している余裕もやはりなかった。

そして逃げずにまだ抵抗の意思を見せる最後の1匹を掴み遠方へと放り投げるとようやくその場は静かになった。

彼女は少し怯えていたようだが、それを思いやる余裕はない。

言葉が通じるかは不安だが一応訊いてみる。

「すみません、家に帰る道が分からなくなってしまったんですが、ここがどこか……出来れば道も教えていただけませんか。帰って見たいドラマがあるんです」

女の子が訝しげな表情を浮かべたので、言葉が通じないと思ったがそんなことはなかった。彼女は落ち着きを取り戻すところらに返答をくれ

た。

「あの、えーと仰ることが良く分かりませんが……助けてくれてありがとうございます。良ければお礼をさせて頂きたいので、ひとまずガヤの町にある私の家に来てもらえませんか？」

そう言った彼女は私の指先ほどの小さな頭をペコリと下げた。

最初の草木に違和感を覚えたのはそうだ。

犬も人も馬車も、ここにあるものは全てがやたら小さいのだった。

2

ガヤ領。ガヤの町。

そこは大きくもなく小さくもない（サイズでなく規模の話だ）普通の町だった。

話を聞けばその女の子、この領主の娘だそうだ。

家の中には入れなかったもので、庭まで案内されると父親、つまりは領主も顔を出す。

「娘をありがとうございます。巨人族の方がまだいてしかも助けてくれるとは。……しかしブラックドッグが出るという事は、やはりあの噂は本当なのか……」

私としては早く帰り道だけを訊きたかったのだが、領主は用もないのに話し始める。何でも最近近くの廃城に魔物が住みつき、それが徐々に数を増やしてはたまに人里へと襲いに来るのだそうだ。

話を聞きつつも私は少し焦り始めていた。

「あの、話の途中ですみませんが、今って何時ですかね？」

「何時？ ああ、日が沈んでから大体3時間と言ったところでしょうか」

時計がないのか正確な時間は分からなかった。しかし聞く限りでは元の場所とそこまで時差はないようだ。とにかく余裕を持って退勤したと言えど、そこまで油を売っている時間もない。領主に気付いたらここにいたこと、帰り道を探していることを伝える。

「多分ここは私が来た場所とは色んな意味で遠くだと思うんですが何かそういった話は聞いたことありませんか？ ドラマの39番目の訪問者、先週が事件編で今週にその解決をするんですよ。1週間待たされたので、出来れば録画じゃなくて生で見たいんですよね」

「えーと、何の話かはよく分かりませんが、そうですね……先代の領主の記録の中にそのような迷い人の話を見たことがあります」

何でも数十年前にも似たようなことが起き、迷い人は何日かここに滞在した後にとある空間の歪んだ場所から元の世界に帰って行ったのだと言う。

「その場所ってどこにあるんですか？」

当然のように質問したが、それに対してやや困った顔をして領主は言い辛そうに答えた。

「昔は国の防衛線として使われていましたが、今はもう誰も使っていない場所で……私たちが廃城と呼んでいる場所です」

場所が分かれば、善は急げだ。

領主は今夜はもう遅いから泊まって行ってはどうか、お礼も足りてないから明日になればこの町の料理を振る舞えるなど言っていたが、明日

帰って何の意味があるんだろうか？

ただ娘——名前はステラだったかストラだったか——が道案内をしてくれると言ったので、それだけは有難く受け取らせてもらうことにした。

馬車よりも私が運んだ方が速そうなので、ストラを手の平に乗せて廃城へと向かう。

「巨人様はどうしても帰らなくてはいけないのでしょうか？」

「はい、先程も言いましたが見たいドラマがあるので」

「……それは見知らぬ土地に来ても依り代となり、道標となるようなあなたにとって大事なものなんですね」

「はい、私もこれほど楽しみにしている作品も数年ぶりです」

「あの、あなたの大事な物の話をもっと聞かせて下さい」

ストラもドラマ好きなんだろうか。テレビはないものとして考えていたが、意外とここにもあるのかも知れない。しまった、それを聞くのを忘れていた。まあ、私としてはやはり自分の家でゆったりと見たいものだ。

「39番目の訪問者は、夫が失踪し、そのショックで引き籠ってしまった女の家に様々な訪問者が来る話でして、最初の保険のセールスマンは——」

私はネタバレになり過ぎないように粗筋を語りながら歩いた。現在9話までしか見てないので、どこが結末への伏線になっているかが分からなく、なかなか骨の折れる説明だ。しかしこれで興味を持って見てくれれば私としても嬉しいものである。

「それで11番目に来たうどん屋（昼食の出前）との会話で、夫の行方を少しだけ匂わせるシーンがあって、私はそこがとても好きなんです」

「はあ……」

彼女は私の話真剣に耳を傾けてくれている……のかどうかは分からないが、やや上気した顔で私をじっと見ながら「はあ」とか「そうなんですか」とか「私もあなたの世界に行ってみたいです」を繰り返しているのだから、多分話に夢中なのだろう。

そうこうしているうちに廃城が見えてきた。

4

廃城で私たちを出迎えたのは、大量の黒い犬や枝を振り回す老木であった。

私は急ぎつつも慌てることなく、それらを一匹ずつ潰していく。

どうやらこの土地の生物は単に小さいだけでなく、力もサイズ以上に弱いらしい。

老木の攻撃も輪ゴムをぶつけられるほどの威力もなく、魔物退治と言うよりは草むしりの気分であった。

「えーと、その場所って言うのはこの城のどこですか？」

「確か地下1階だったと思います……」

地下か……少し面倒だな。

ストラに許可を取りまらずに廃城を片付ける。あまり散らかしても悪いので上から少しずつブロックをどけていく作業だ。その最中にも羽の生えたライオンやら、槍（爪楊枝程度の鋭さ）でツンツンと手を突いてくる鎧やらがいたが、邪魔なのでまとめてどかして土をかけて埋めてしまった。

そしてそのまま今度は地下を掘る作業に移る。

土をよけて1階の床を外していく感じだ。

やがて全ての床をどかすと端の方の小部屋に確かに空間の歪みが見えた。

どうやら間に合ったらしい。

「ああ、ここに触れれば良いんですね。案内ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。これで廃城の魔物も町の者達だけで退治できる量まで減らせたと思います。何とお礼を言っていていいやら」

歪んだ空間のサイズは小さいが、ちょっと触れてみると何やら吸い込まれるような感覚がする。このまま全身を突っ込むような形でいけそうであった。

「……あの巨人様……領主の娘としてだけでなく私個人としても本当に感謝して……そのあなた様の勇士、本当に格好良かったです。もし宜しければもう少し滞在……いえ、たまに戻ってきてお顔だけでも見せ——」

何とか全身をその歪みへと入れることが出来た。

あとは行き先がうまく自宅の近くになるかどうかと言ったところである。

5

暗転。そして見慣れた住宅街が視界に入る。

どうやら元の場所へと戻ってこれたようだ。

時刻は8時50分。自宅まで20分ほどなので思ったよりギリギリだったようだ。

(今日のご飯はドラマの後だな……)

まあ、トラブルに巻き込まれたが時間までに帰って来ただけでも良

しとしよう。

電車の遅延のようなものだ。上手く行かない日だってある。

さあ、今日はどんな驚きの解答が待っているのか。楽しみだ。

私は走り出したい衝動を抑えて帰路についた。

その後3分も歩くと、突如虹色の光と魔法陣のような文様が地面に現れる。

そして気が付けば私は見知らぬ荒野に立っていた。

空には月が2つ。そして竜にしか見えない巨大な影が天を走っている。

少なくとも日本でない事だけは確かなようだ。

「……………」

私は「たまには録画で見るのも悪くない」と自分に言い聞かせることにした。

(了)

あとがき

1作目が「現世に心残りのない話」だったので、2作目は「現世に心残りしかない話」でした。

所謂流行りの「異世界召喚俺TUEEEE！！」物です。

ストラ＝エキストラから。